

意識をデザインする仕事

吉見 佳那子 1), 2)

- 1) リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
- 2) 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 摂食嚥下リハビリテーション学分野

意識をデザインする仕事
「福祉の常識」を覆すピープルデザインが目指すもの
須藤シンジ 著
CCC メディアハウス
2014 年



NPO 法人ピープルデザイン研究所など現在 3 つの法人の代表を務めている著者の須藤さんは、障がい者などのマイノリティや福祉に対する「意識のバリア」を無くすべく、デザインという手段を使って様々な活動をされている。ハンディがあるために健常者と「分かれている」、「混ざることがない」という状態が、障がい者と健常者の意識に見えないバリアを作っていることに気付いた著者は、意識のバリアフリーを進めるためにデザインで人の意識を変えることを考えた。障がい者の親として、全ての人が混じり合う多様性社会（ダイバーシティ）を実現しようと試行錯誤してきた様子が書かれている。

須藤さんは、次男が重度の脳性マヒで生まれたことをきっかけに福祉サービスを受け、日本の福祉の実情を知り閉塞感を感じた。息子が歩行訓練を始めたとき、息子が履けるカッコいい靴（装具）がないことに気付いた。そこで、障がい者が使用する福祉用具をダサイとかかわいそうなものではなく、カッ

こいい、オシャレにしたいと自ら行動を起こしていく。「モノづくり」から始まったピープルデザインは、商店街やカフェでのイベント開催や、認知症の人にもフレンドリーな「マチづくり」、そして就労支援や教育、次世代に新しい価値観を伝える「ヒトづくり」へと発展する。

この本のタイトルにある「ピープルデザイン」とは、バリアフリーでもユニバーサルデザインでもない、意識のバリアフリーを概念として著者が作った新しい言葉だ。この本が出版されたのは今からちょうど 10 年前で、ダイバーシティやインクルージョンという言葉はまだ世間に浸透していなかったように思う。私は訪問診療に携わるようになってから様々な患者に接し、ハンディのある人の生活とそれを支える様々な支援を知ることができた。短い診療時間では患者の本当の生活状況や困りごとのうちの一部分にしか気が付けないこともあるが、最近様々なメディアや SNS で情報が発信されるようになり、目にみえないハンディやバリアに対する「気付き」を得ることも増えた。ハンディがある人を前にして、どうやって関わればいいかわからない、手助けの仕方がわからないという気持ちは、皆が分けられることなく同じ場を共有することで相手のことを知り、思いやることから変えることができるのである。まずは自分の中の認識や常識を見つめ直し、意識のバリアを無くすことが新しいアクションにつながる、ということを改めて考えることができた本である。

- 1) リハビリテーション・エンジニアリング 編集委員会
- 2) 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
摂食嚥下リハビリテーション学分野
〒113-8510 東京都文京区湯島 1-5-45